

V 渡鹿地区の調査

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査（9408・9413）

（1）調査の目的と経過

a. 調査地と調査経緯

本調査は熊本大学渡鹿団地野球場等整備工事に伴うものである。Ⅰ次・Ⅱ次にわたる調査であり、Ⅰ次調査は集水桝設置のため、Ⅱ次調査は透水管埋設のために実施した。それぞれ9408地点、9413地点と称する（図38）。

本調査区は1977年に現在の運動場造成に伴い発掘調査がなされている。調査主体は熊本大学を中心としたものであり、現運動場の南東部分を中心に調査を行ない、13基の住居址が確認された。奈良朝から平安中期にわたる住居址であり、大小それぞれ相違があり、北側またはそれに近い箇所の外壁中央に炉跡をもつことが住居址の特徴であるという結果を得ている（熊本市教育委員会1980）。また同調査区域内において、縄文時代晩期初頭のものを主体とする土器片が多数出土している。

b. 調査の経過

以上の調査結果を踏まえ、以下の日程の通り調査を実施した。

<Ⅰ次調査日程>

Ⅰ次調査は平成6年8月1日より実質8日間に渡る調査である。集水桝設置箇所に、必要な掘削範囲をもって11箇所のトレンチを設け、掘削の及ぶ深度までの調査を行った。遺物包含層および遺構の保存状態の確認を目的としたものである。調査面積は総計で40.4㎡であった。

8月1日 調査開始。第1～11トレンチを設定。重機による掘り下げを開始。第1トレンチにおいて遺物の集中がみられる。

8月2日 手作業による掘り下げ。第11トレンチにおいて土師器壺の一部が出土。

8月4日 全トレンチ完掘。

8月5日 電気配線工事立会調査。

8月8日 包含層の傾斜確認の為、グラウンド内を東南より北西に向かって10m間隔で試掘を開始。

8月9日 写真撮影、実測作業。

8月10日 全調査終了。

<Ⅱ次調査日程>

Ⅰ次調査の結果より、かなり上位において遺物包含層が確認され、配管工事による影響を受けると考えられる運動場内東南部を調査するに至った。透水管が交差する地点を中心に、透水管の走る方向に沿って、5×10mのトレンチを3箇所に設定し、発掘調査を行った。また第1～3トレンチの調査から、より東側および南側の地区においての工事による遺跡破壊の可能性が浮かび上がり、該当地区に第4トレンチおよび任意トレンチを設定し、調査するに至った。調査の総面積は200㎡であった。

11月10日 重機にて表土より50cmを掘り下げる。遺物包含層に到達。

11月14日 作業員投入。手作業にて掘り下げ開始。第2トレンチにおいて遺物が多量に出土。

11月18日 自動車部練習場試掘。

11月21日 第2トレンチにおいて古代の道路跡を検出。

11月24日 第1トレンチにおいて住居址床面を検出。第3トレンチにおいて住居址を確認。検出進行。

11月25日 第2トレンチの道路遺構を断面確認のため断ち割る。

11月30日 第1トレンチ住居址完掘。

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

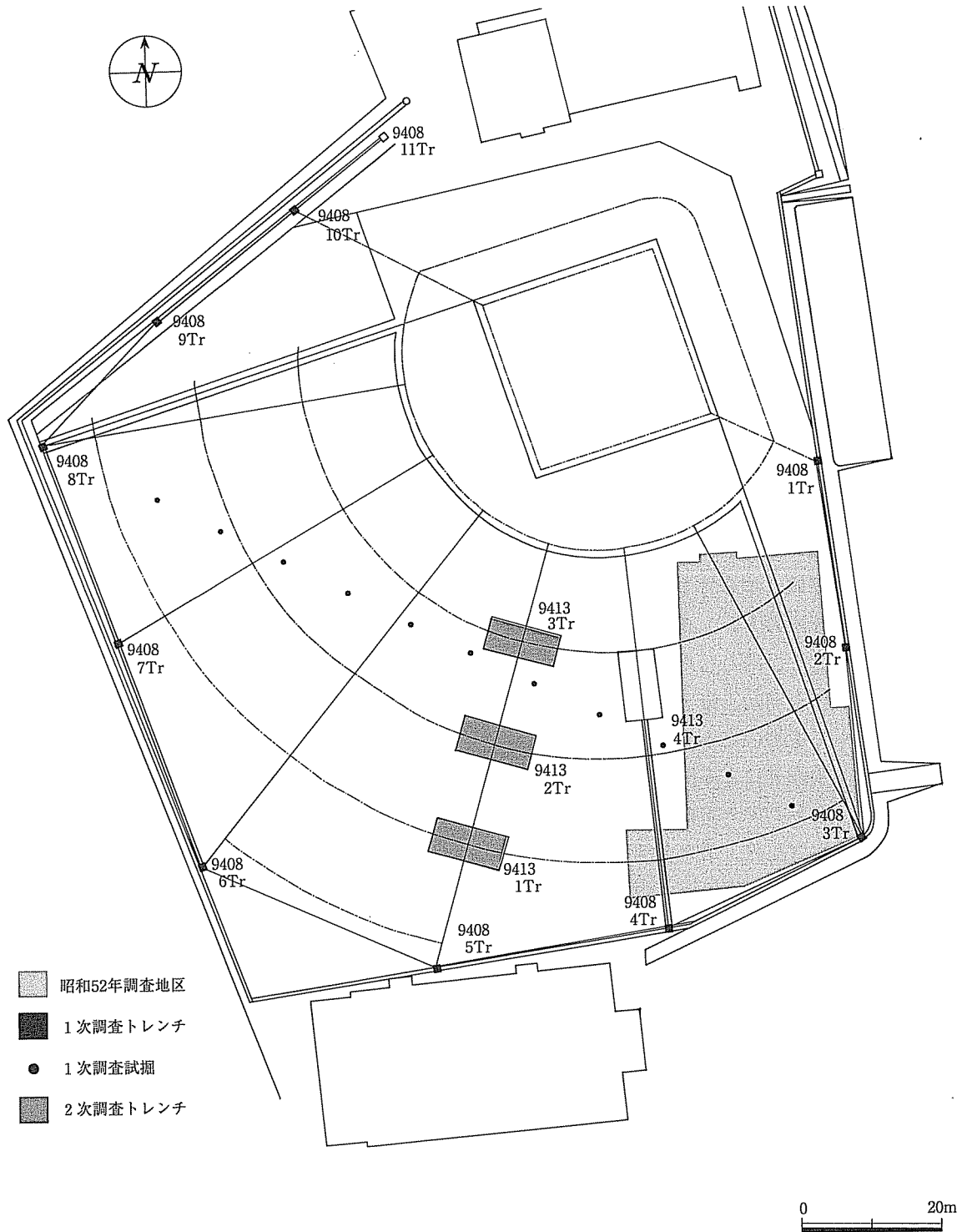


図38 9408・9413調査地点配置図 (1/910)

12月2日 第2・3トレンチ完掘。

12月7日 第1・2トレンチ図面終了。調査の結果より、工事によって影響を受けると考えられる位置に第4トレンチを設定。掘り下げ開始。

12月8日 第3トレンチの住居址において竈を検出。

12月9日 第3トレンチ図面終了。第4トレンチにおいて住居址3基を確認。検出進行。

12月14日 第4トレンチの住居が2基ずつの重複で、計4基であることを確認。第4トレンチより

南へ向かって、透水管埋設部分に確認のためトレンチを掘る。

12月16日 住居址完掘。竈を断ち割る。

12月19日 竈完掘。トレンチ調査終了。

12月22日 竈実測の終了をもって、全調査終了。

c. 調査の組織

調査員：原田範昭（現熊本市文化課）

事務担当：矢野希久代

発掘作業員：相川奈美・飯田孝俊・稲田和加・今村佳子・岩谷史記・中藪拓也・大塚宏之・大坪志子・岡部是央・岡本久美子・甲斐美紀代・甲斐田末男・川野博之・清田志野・蔵富士寛・古賀敬子・後藤郁子・小深田ナオ・佐藤タエ子・澤田まり子・柴田やよひ・高崎芳美・高松幸一・田崎末人・田中末光・田中聡一・田中大介・田中レイ・土田ちえみ・中嶋由起子・中村さつき・中村哲史・橋本みどり・花田誉宣・林田恵子・春木藤美・番山明子・東真一・藤田實千代・藤岡泰江・古屋俊英・本田晶子・本田浩二郎・榎林啓介・益永武史・松井昭子・松浦一之介・松里健一・丸岡恵子・美浦雄二・村山志穂・山口健剛・山下直哉・吉岡和哉・若杉あずさ・若杉竜太

整理作業員：甲斐美紀代・古賀敬子・柴田やよひ・田中レイ・土田ちえみ・橋本みどり・林田恵子・春木藤美・藤岡泰江・松井昭子

(2) 調査区の基本層序（図39・40）

渡鹿グラウンドにおける調査で確認された層序は、以下のとおりである。

- 1層：黄褐色土層（2.5Y5/3） 運動場造成時の客土である。整地によって非常に堅くしまっている。石・砂・炭・焼土粒などの混入物を多く含む。厚さ10～30cm。
- 2層：オリーブ褐色土層（2.5Y4/3） 整地前の表土層である。土質は1層と同様である。混入物は少ない。遺物をわずかに含む。厚さ20～30cm。
- 3層：黒褐色土層（2.5Y3/2） 遺物包含層である。しまりはなく、柔らかい。橙色の焼土粒を含む。厚さ40～50cm。
- 4層：暗褐色土層（10YR3/3） 無遺物層である。緻密であり、住居址が掘り込まれる。混入物はほとんどない。厚さ30～80cm。
- 5層：黒褐色土層（10YR3/1） IV層と同様の土に黒ニガと呼ばれる黒色の土が混じる。上面における凹凸が激しい。混入物はない。厚さ10～80cm。
- 6層：黄褐色土層（10YR5/6） ローム層である。粘性があり、緻密である。

(3) 検出遺構

< I次調査：9408調査地点トレンチ所見 >

今調査は集水桝設置場所に、必要な広さおよび深さのトレンチを11箇所にて設け、遺物包含層および遺構の保存状況確認を目的として行った。トレンチは東側側溝沿いより運動場を一周して同場北端まで、右回りで第1～11トレンチとする（図38）。

第1トレンチ 1.8×1.7mのトレンチである。東側は運動場造成時に攪乱を受けている。また西側は配管による攪乱を受けている。残存部において地表下10cmにて遺物包含層を確認。

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

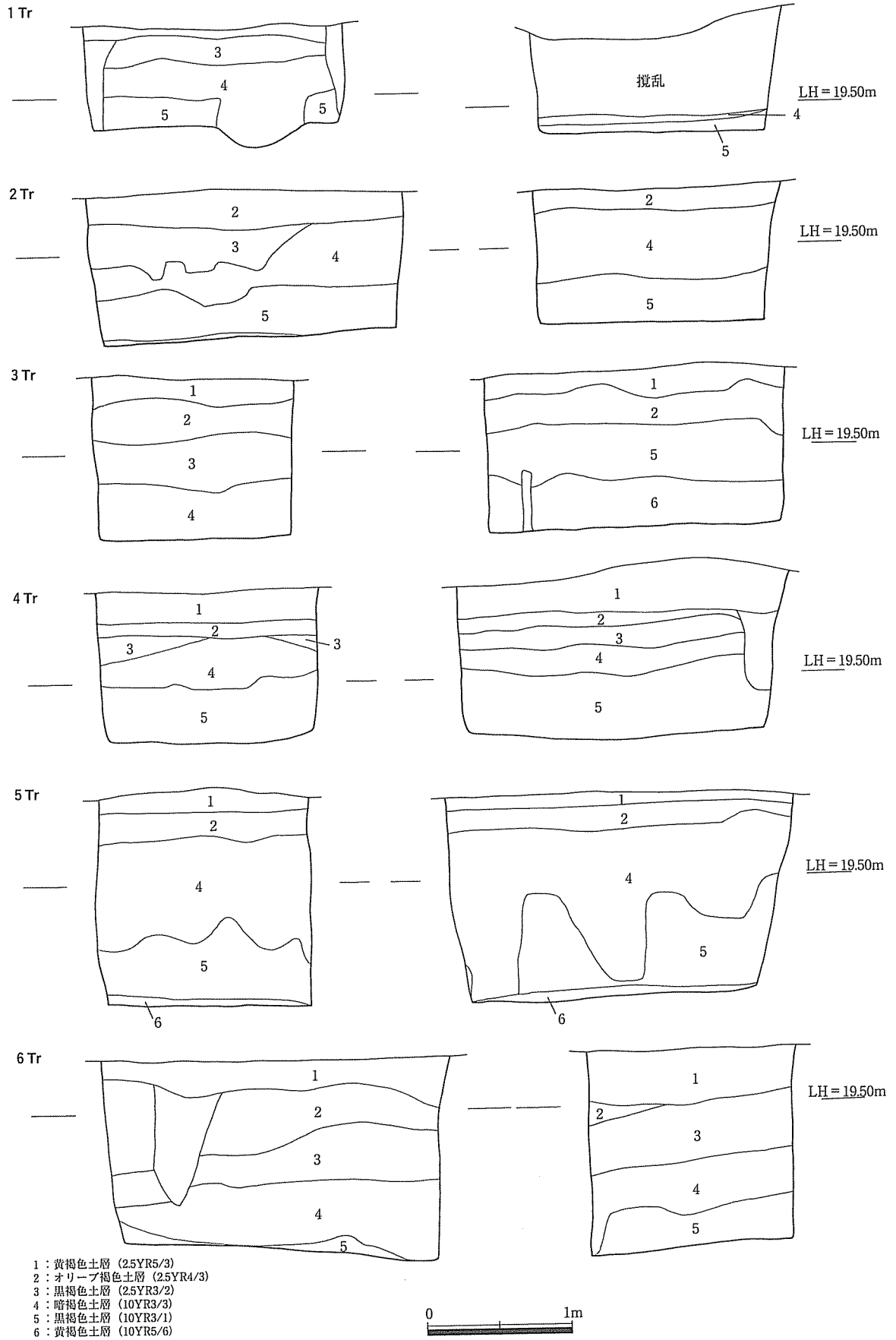


図39 9408調査地点トレンチ土層断面実測図1 (1/40)

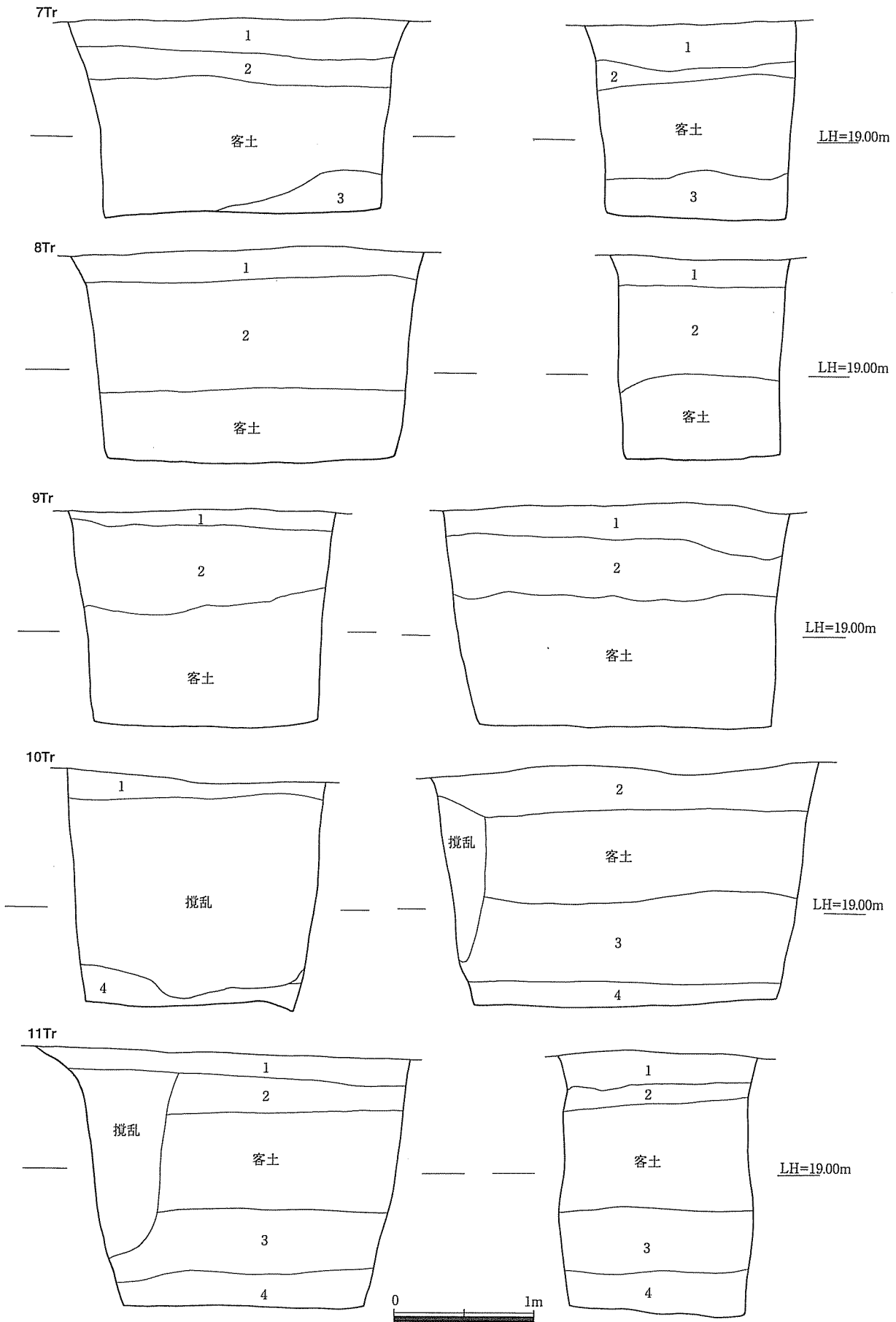


図40 9408調査地点トレンチ土層断面実測図2 (1/40)

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

須恵器・土師器片が多数出土（図45）。遺構は確認できなかった。

- 第2トレンチ 2.2×1.7mのトレンチである。地表下20cmにおいて遺物包含層を確認。運動場内に広がる遺物包含層の東端である。したがってトレンチ東壁に包含層は確認できない。遺構は存在しない。
- 第3トレンチ 1.4×2.0mのトレンチである。遺物包含層は確認できない。グラウンド造成時に既に削平されたものと考えられる。地表下75cmにおいてローム層を確認。これより上層は客土である。
- 第4トレンチ 1.5×2.3mのトレンチである。南側は攪乱を受ける。地表下30cmにおいて遺物包含層を確認。しかし包含層の上部は、造成時に大部分削平されている。遺構は存在しない。
- 第5トレンチ 1.4×2.4mのトレンチである。遺物包含層は確認できない。大部分が造成時に削平されたと考えられる。包含層下の自然堆積土層を確認。
- 第6トレンチ 2.4×1.4mのトレンチである。地表下30～80cmにて遺物包含層を確認。部分的に攪乱を受けている。遺構は確認できない。
- 第7トレンチ 2.5×1.5mのトレンチである。地表下1.1mにて遺物包含層を確認。遺構は確認できない。
- 第8トレンチ 2.5×1.3mのトレンチである。深さ1.5mまで調査を行ったが、包含層は確認できない。1.5m以下に堆積するものと考えられる。
- 第9トレンチ 1.9×2.5mのトレンチである。深さ1.5mまで調査を行ったが、包含層は確認できない。第8トレンチ同様、1.5m以下に堆積すると考えられる。
- 第10トレンチ 1.9×2.7mのトレンチである。地表下1.55mにおいて遺物包含層を確認。現段階では遺構は確認できず、工事による遺構への影響はない。
- 第11トレンチ 2.7×1.4mのトレンチである。西側はフェンス設営時に攪乱を受けている。地表下1.1mにおいて遺物包含層を確認。遺構は存在しない。

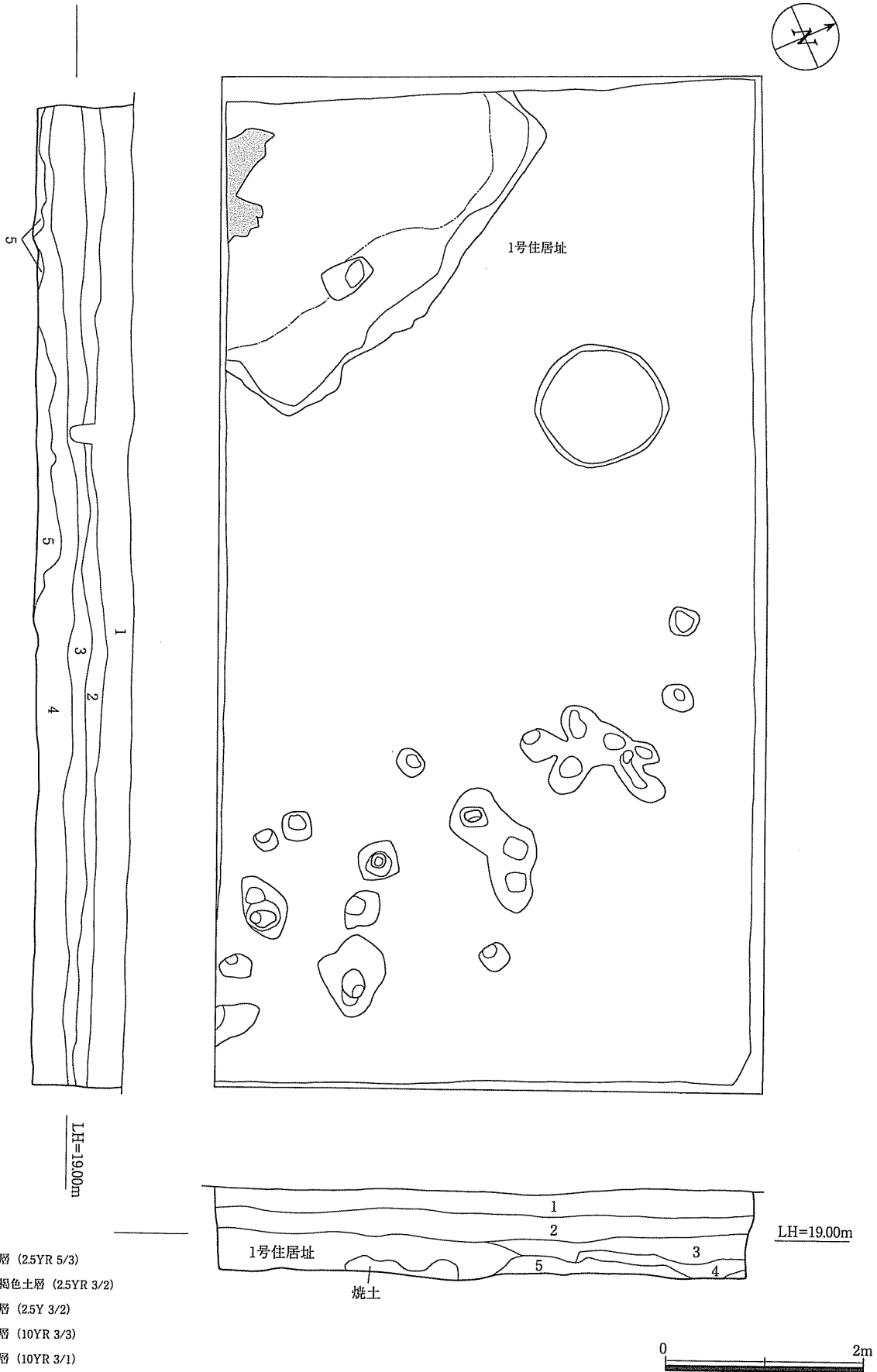
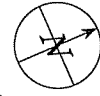
以上が各トレンチにおける所見である。また第3トレンチと第8トレンチを結ぶ直線上に、10m間隔で0.5×0.5mの試掘を11箇所行った（図38）。方向は南東から北西である。南東側では地表下18cmにおいて包含層を確認でき、北西に進むにしたがって次第に深くなり、最も北西では地表下82cmで確認できる。トレンチ調査の結果と総合した場合、遺物包含層は南東から北西に向かって傾斜して堆積していると考えられる。これは旧地形の起伏によるものと考えている。

<Ⅱ次調査：9413調査地点の検出遺構>

1977年の調査より本調査区が奈良から平安時代の集落跡であることが確認されているが、今回の調査でも竪穴住居址7基と道路跡1条を検出した（図41～44）。竪穴住居址はすべて4層に掘り込まれている。また出土遺物により住居址はすべて同時期に属するものと考えている。住居内の覆土は黒褐色（2.5Y5/3）の土であり、3層と同質のものである。住居内における分層はできない。住居外に比べ焼土粒や灰がより多く含まれることが、平面における住居址の確認の手掛かりとなる。住居址は、第1トレンチより確認された順に1～7号とした。

<竪穴住居址>

1号竪穴住居址（図41・図版25－8）



- 1. 黄褐色土層 (2.5YR 5/3)
- 2. オリーブ褐色土層 (2.5YR 3/2)
- 3. 黒褐色土層 (2.5Y 3/2)
- 4. 暗褐色土層 (10YR 3/3)
- 5. 黒褐色土層 (10YR 3/1)

図41 9413調査地点第1トレンチ遺構配置図・北壁・西壁土層断面実測図 (1/60)

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

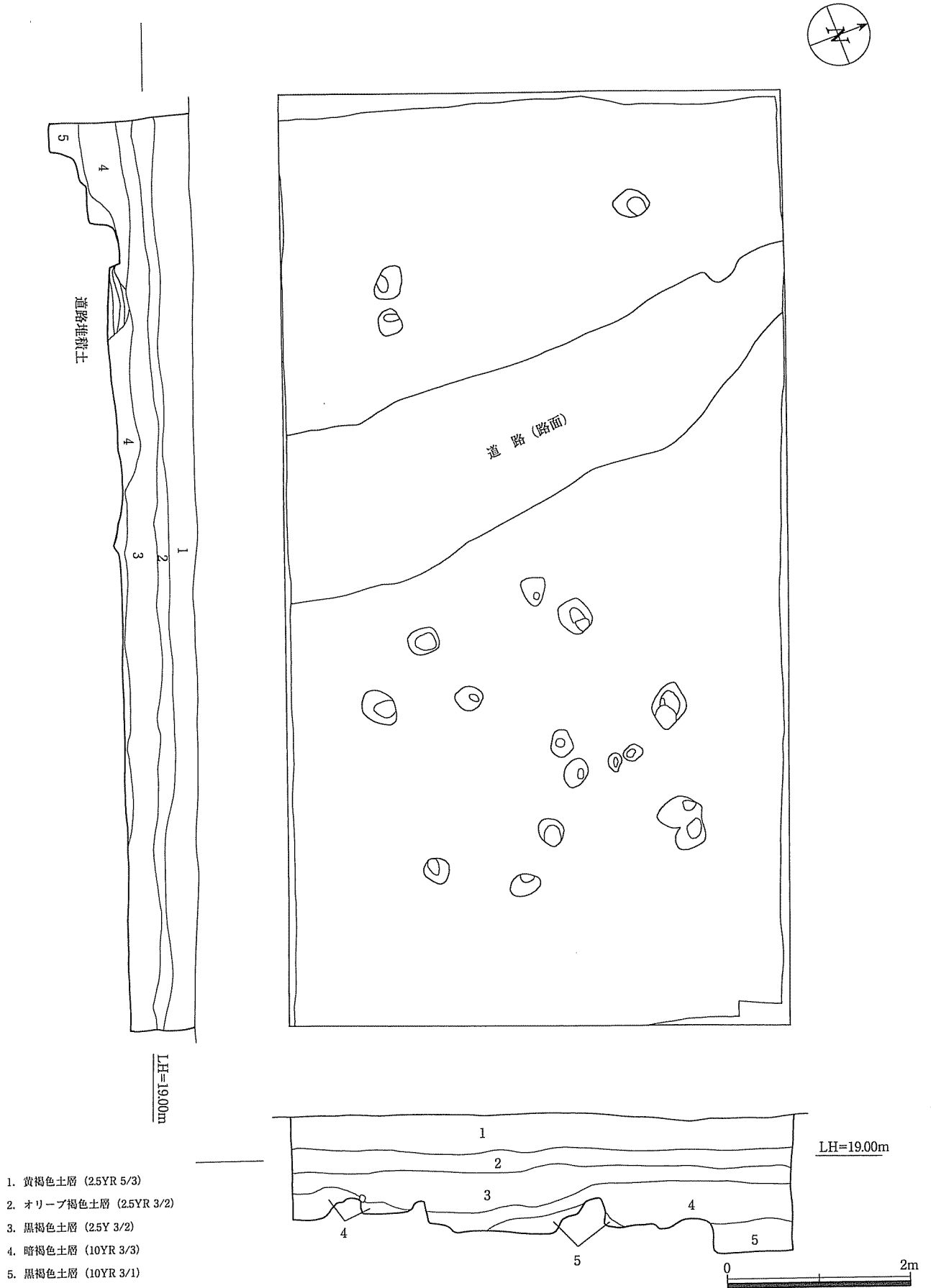


図42 9413調査地点第2トレンチ遺構配置図・北壁・西壁土層断面実測図 (1/60)

第1トレンチ内南西隅において検出した。住居址の大部分は調査区外にあるため、住居址1/4程度の調査となった。東壁のみを完全に調査することができ、他のトレンチにおける調査結果を考え合わせた場合、プランは一辺4mの正方形を推定することができる。主軸はN-34°-Wである。残存する壁高は20cmである。柱穴は確認できなかった。住居内東側に長軸50cm、短軸30cmの楕円形を呈する凹みがあるが、深さ13cmと浅いため、柱穴とは考え難い。住居内床面には被熱した粘土塊が広がっているため、竈をもつものと考えられる。他の調査結果から竈は北壁寄りに付設するであろう。

2号竪穴住居址 (図43・図版25-9)

第3トレンチの北東隅より検出。一部分が調査区外となるため、全容は明らかではない。2号住居址は大部分が調査区外にあることや、3号住居址内の覆土に掘り込まれていることなどより確認が遅れ、床面のみの確認となった。

3号竪穴住居址 (図43・図版25-9)

第3トレンチの北東隅において、2号住居址と重複して存在する。3号住居址は東壁部分が調査区外となり、約2/3程度の検出となったが、完全に把握することができた西壁より推定した場合、そのプランは1辺4mの正方形を呈すると考えられる。主軸はN-32°-Wである。残存する壁高は26cmである。3号住居址内では7個の柱穴を検出した。直径20~30cmの円形ピットであり、深さは20~30cmである。床面の硬化した部分を囲むように配列されているようである。住居北西隅の灰や焼土が集中する地点において、被熱した砂岩のようなブロックが床面直上に散在する。また同地点より直径45cm、深さ30cmの、内部に灰や焼土を充填する掘り込みを検出した。前者は破壊をうけた竈の構築材の一部であり、後者は竈内の掘り込みと想定している。

4号竪穴住居址 (図44・図版25-10)

第4トレンチの中央東寄りに存在する。トレンチ東壁部分にひっかり、5号住居址の上に重複して掘りこまれている。プランは西壁1辺2.8mを検出したが、全容は把握できない。主軸はN-16°-Wである。残存する壁高は12cmである。住居内に柱穴を4個検出した。規模は直径20~50cm・深さ20~95cmと不揃いである。全容は判然としないが、住居の軸に沿って、それぞれの壁際中央部と住居の中心部とに、十字に柱が配列されていたのではないかと想定している。竈は北壁の西隅を一部掘り込む形で構築されている。整形された砂岩製のブロックを中央の支柱および両袖部に用い、壁体は粘土を貼り付けることによって形成されている。焚口幅80cm、奥行50cmの規模をもつ。上部構造は確認できない。

5号竪穴住居址 (図44・図版25-12)

第4トレンチのほぼ中央において、4号住居址にその東側の一部を切り取られる形で存在する。平面プランは3.5×3.8mの隅丸方形を呈する。主軸はN-45°-Wである。残存する壁高は18cmである。柱穴は住居内に5個、住居外に3個検出したが、位置的にすべてが住居に伴うものとは考え難い。規模は直径30~40cmであり、深さは住居中央付近と南西隅のものが60~95cmと深く、その他が15~40cmと比較的浅い。竈は住居北壁の中央を一部掘り込み、砂岩製ブロックと粘土を用いて構築されている。破壊を受けているが、残存部よりの推定規模は焚口幅1.5m、奥行1.0mと大きなものとなる。竈内部に堆積した土より土師器坏片が出土している。

6号竪穴住居址 (図44・図版25-14)

第4トレンチの北東隅に位置する。東壁と南壁の一部が調査区外となる。平面プランは2.5×3.5mの方形プランである。主軸はN-22°-Wである。残存する壁高は15cmである。柱穴は住居内に4個、住居外に1個を検出した。規模は直径25~40cmであり、深さは15~65cmと統一を欠く。竈は住

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

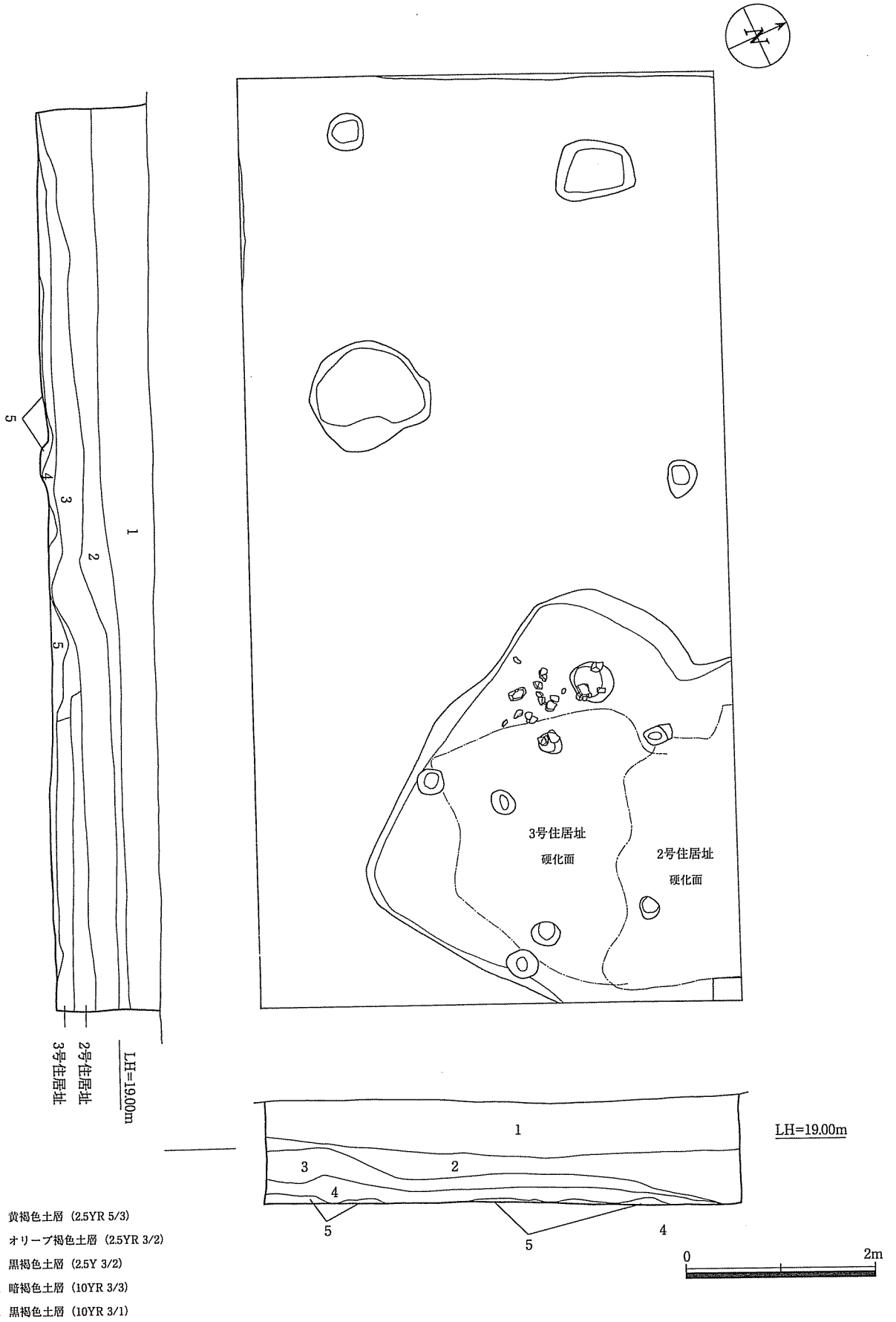


図43 9413調査地点第3トレンチ遺構配置図・北壁・西壁土層断面実測図 (1/60)

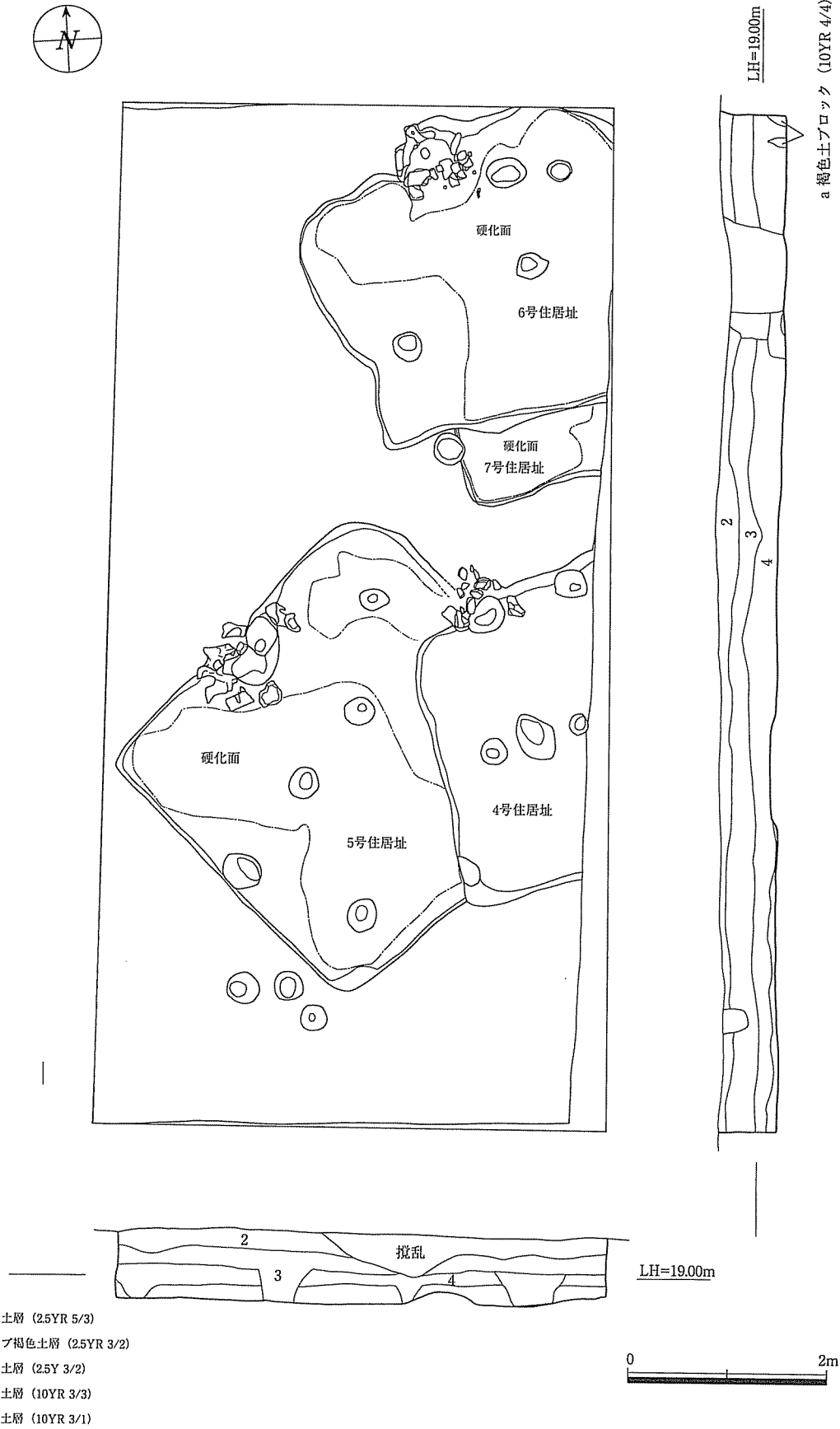


図44 9413調査地点第4トレンチ遺構配置図・北壁・西壁土層断面実測図 (1/60)

居址北壁中央に位置する（図版25-15）。両袖部及び支柱に柱状に加工した砂岩製ブロックを用い、燃焼部には高さを揃えた同質のブロックを敷きつめている。竈壁体は粘土を用いて形成されている。煙道部は確認できなかった。焚口幅1.0m・奥行1.0mの規模である。

7号竪穴住居址（図44）

第4トレンチの南東隅において6号住居址にその大部分を切られる形で存在している。また東半分は調査区外に位置する。したがって検出範囲は1.5×0.7mというほんの一部のみの調査となり、規模などの大容は不明である。残存する壁高は8cmである。

<道路>

道路遺構（図42・図版24-7）

第2トレンチ中央やや西寄りに、帯状に伸びる硬化した土層の堆積を検出した。ほぼ南北に沿ってやや西に湾曲しながら、幅1.0mから1.8mをもってトレンチを横断する。V層上面からⅢ層の下部に渡って、焼土粒・砂粒・細かい土器片を多量に含む土（にぶい黄褐色・Hue10YR4/3）の堆積によって形成される。断面観察の結果、4枚の層序を確認した。すべて土質は同じだが、それぞれの層の上面が硬化していることより分層が可能である。人為的に整地が施された結果と考えている。以上よりこれを古代の道路跡と認定した。

（4）出土遺物（図45～48・図版26-28）

出土遺物はパンケース20箱程である。紹介する遺物は遺構出土のものを中心に、時期比定の行いやすいものを抽出した。

9408地点第1トレンチ出土遺物

1次調査の第1トレンチから纏まって出土した遺物群である。ここでは土師器皿・坏の類を図示し

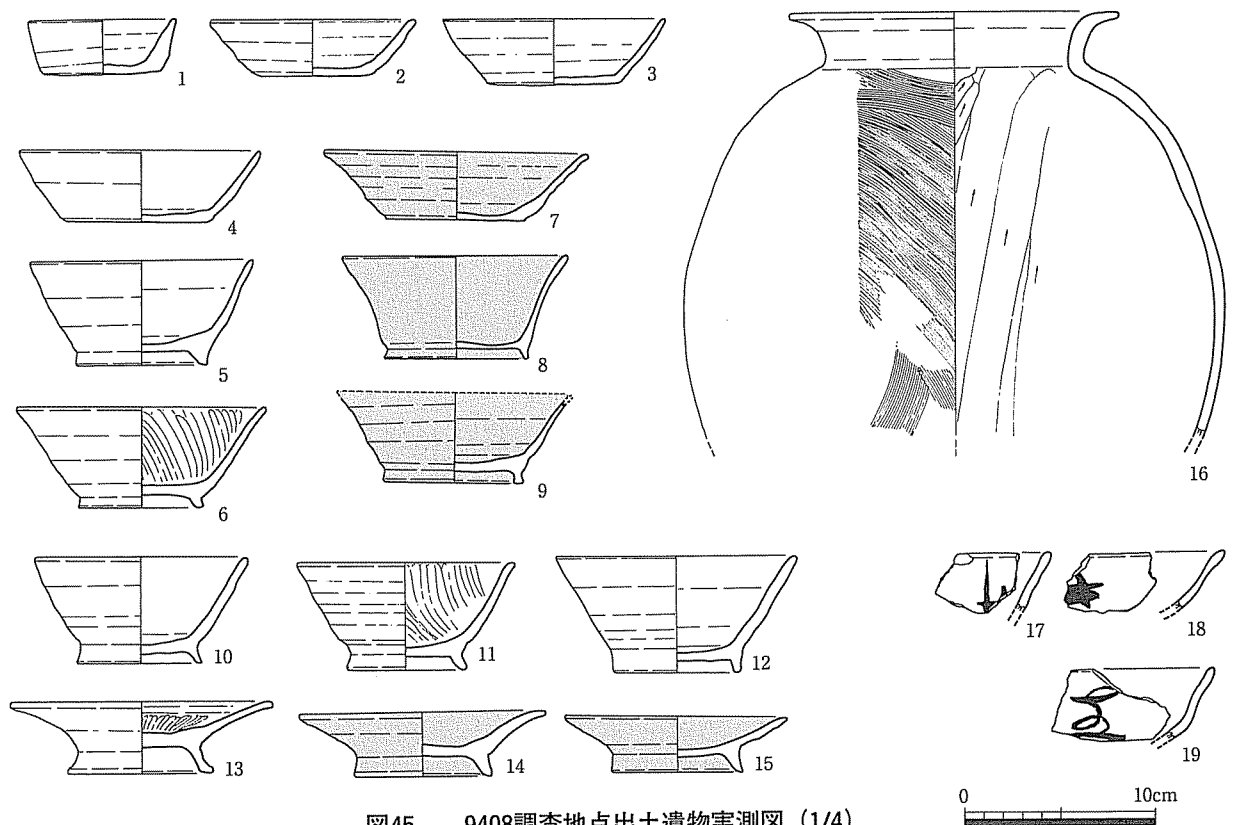


図45 9408調査地点出土遺物実測図（1/4）

表7 9408調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
45	1	土師器	皿(灯明皿)	口径 7.7 底径 6.2 器高 2.9	完形	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue10YR8/3 外: Hue10YR8/3	1Tr II層	煤付着
	2	土師器	坏(灯明皿)	口径 10.8 底径 5.5 器高 3.0	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue5YR7/6 外: Hue7.5YR7/6	1Tr II層	煤付着
	3	土師器	坏	口径 11.8 底径 7.0 器高 3.5	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue10YR7/3 外: Hue10YR8/4	1Tr II層	
	4	土師器	坏	口径 12.7 底径 7.9 器高 3.8	2/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue5YR6/6 外: Hue5YR6/6	1Tr II層	
	5	土師器	碗	口径 11.8 底径 7.0 器高 5.5	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue10YR8/4 外: Hue7.5YR8/6	1Tr II層	
	6	土師器	碗	口径 13.25 底径 6.6 器高 5.4	1/3	内:磨き 外:回転ナデ	内: HueN1.5/0 外: Hue10YR7/4	1Tr II層	
	7	土師器	坏	口径 14.0 底径 7.3 器高 3.6	1/3	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue5YR6/6 外: Hue5YR6/6	1Tr II層	内外丹塗
	8	土師器	碗	口径 12.0 底径 7.7 器高 5.5	1/4	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue10YR8/6 外: Hue10YR8/6	1Tr II層	内外丹塗
	9	土師器	碗	口径 11.9 底径 7.4	底部	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue2.5YR5/6 外: Hue5YR5/6	1Tr II層	内外丹塗
	10	土師器	碗	口径 11.3 底径 6.7 器高 5.6	底部・口縁一部	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR7/6 外: Hue7.5YR7/6	1Tr II層	
	11	土師器	碗	口径 11.4 底径 6.35 器高 5.7	1/3	内:磨き 外:回転ナデ	内: Hue N1.5/0 外: Hue10YR8/3	1Tr II層	
	12	土師器	碗	口径 12.1 底径 6.8 器高 6.2	1/2	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue10YR7/4 外: Hue7.5YR7/6	1Tr II層	
	13	土師器	高台付皿	口径 13.85 底径 7.7 器高 3.85	1/2	内:磨き 外:回転ナデ	内: HueN1.5/0 外: Hue10YR8/2	1Tr II層	
	14	土師器	高台付皿	口径 13.0 底径 7.2 器高 3.4	口縁一部欠損	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR7/6 外: Hue5YR6/6	1Tr II層	内外丹塗
	15	土師器	高台付皿	口径 11.7 底径 6.9 器高 3.0	口縁一部欠損	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR8/6 外: Hue7.5YR7/6	1Tr II層	内外丹塗
	16	土師器	甕	口径 17.2 最大径 28.35	1/4	内:削り 外:ハケ目	内: Hue7.5YR6/4 外: Hue10YR7/4	1Tr II層	
	17	土師器	碗		口縁部片	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR6/6 外: Hue7.5YR6/6	1Tr II層	墨書
	18	土師器	碗		口縁部片	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR6/6 外: Hue7.5YR7/4	1Tr II層	墨書
	19	土師器	碗		口縁部片	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内: Hue7.5YR6/6 外: Hue7.5YR6/6	1Tr II層	墨書

た。1は小型の皿である。外底をヘラで切り離している。2～4・7は坏、5・6・8～12は碗、13～15は高台付きの皿である。6・11・13は黒色土器A(内黒土器)である。7～9・14・15には丹が塗彩してある。1と2は灯明皿として使用されている。時期的には9世紀中頃の比較的まとまった一群であり、完形品に近いものが多く、何らかの遺構内の遺物であった可能性が高い。

9408地点包含層出土遺物

16は土師器甕の口縁部から胴部にかけての比較的大きな破片である。17～19はおそらく土師器の碗

1. 波鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

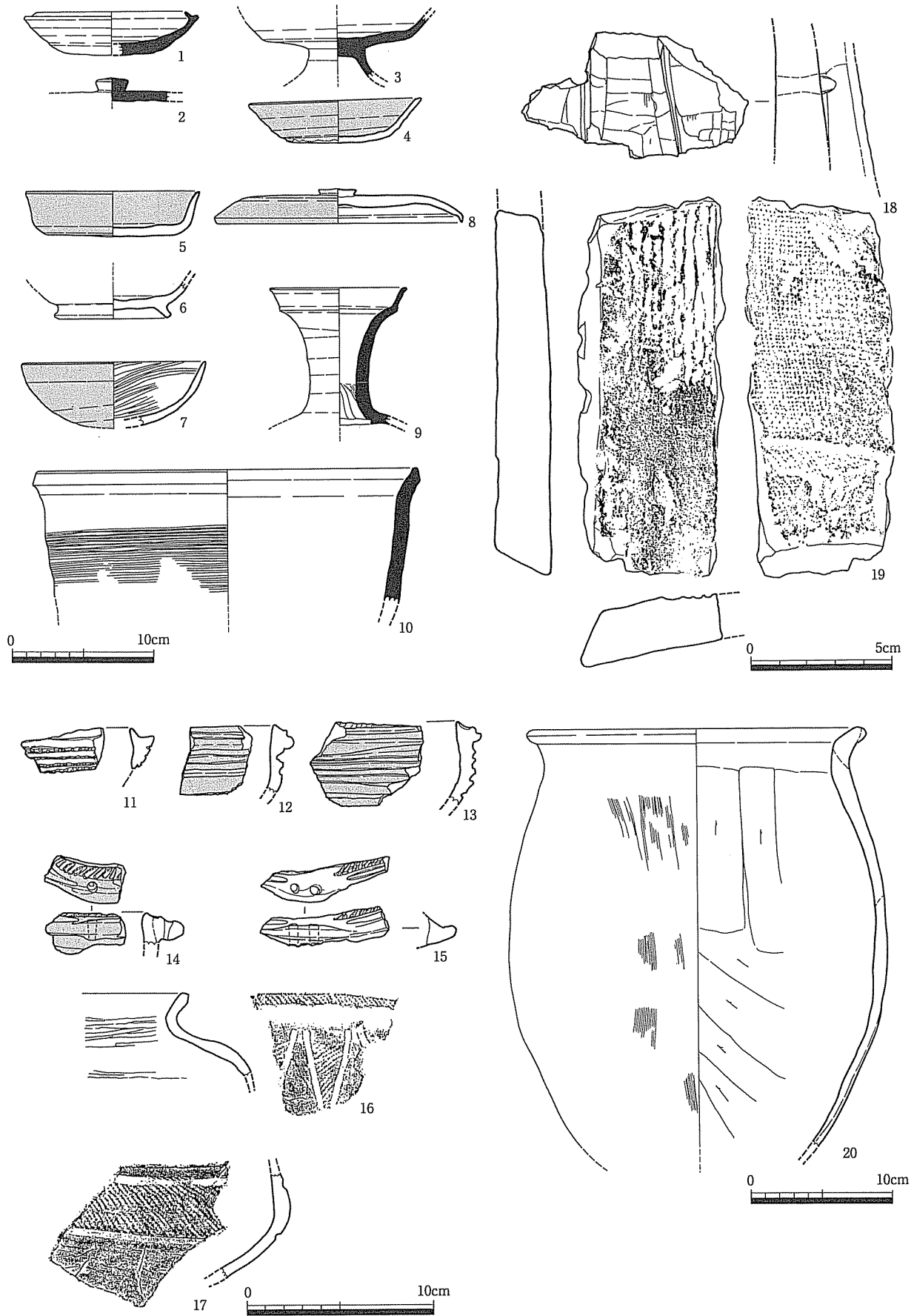


図46 9413調査地点出土遺物実測図1 (1/4・1/2・1/3)

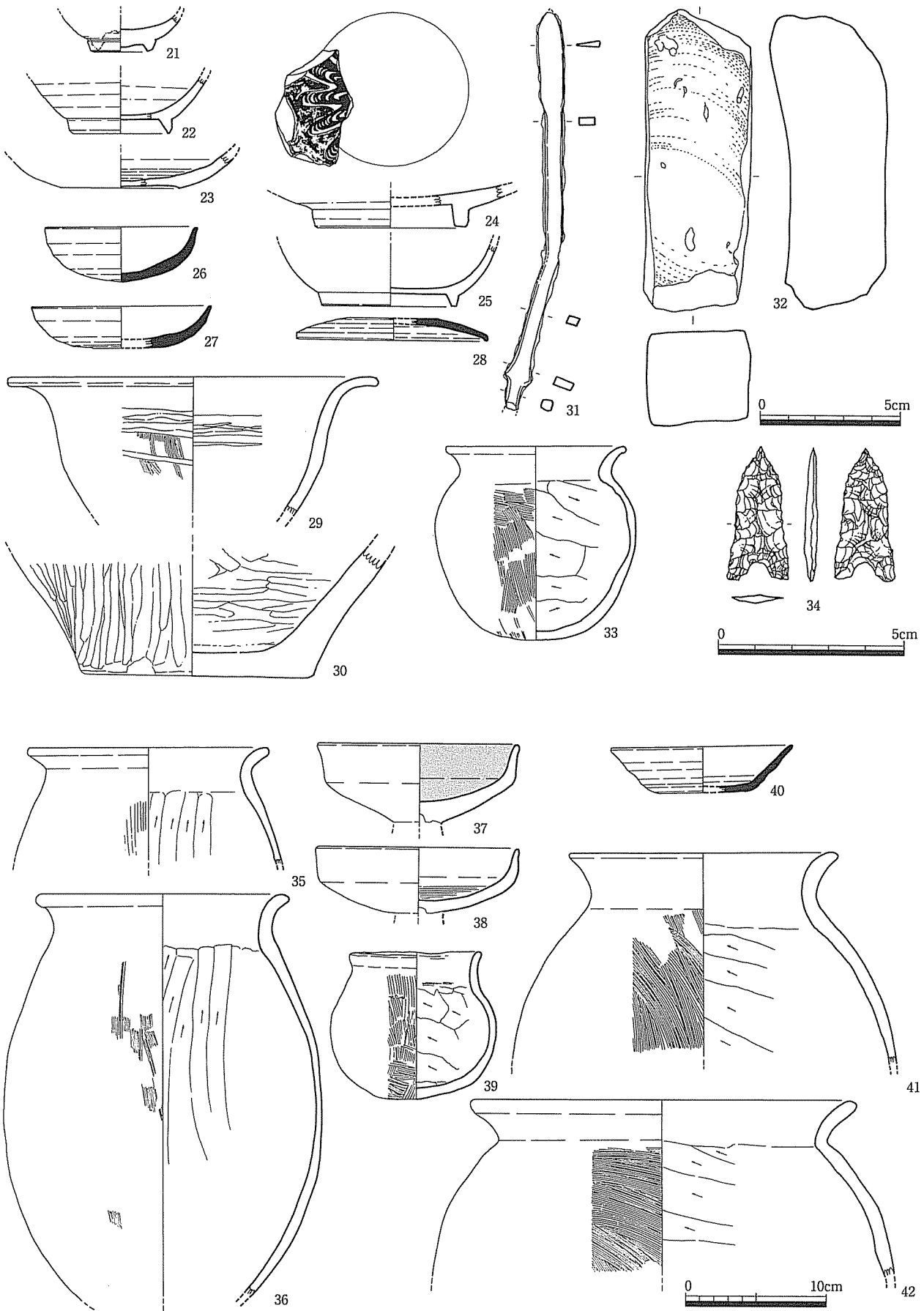


図47 9413調査地点出土遺物実測図 2 (1/4・1/2・2/3)

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

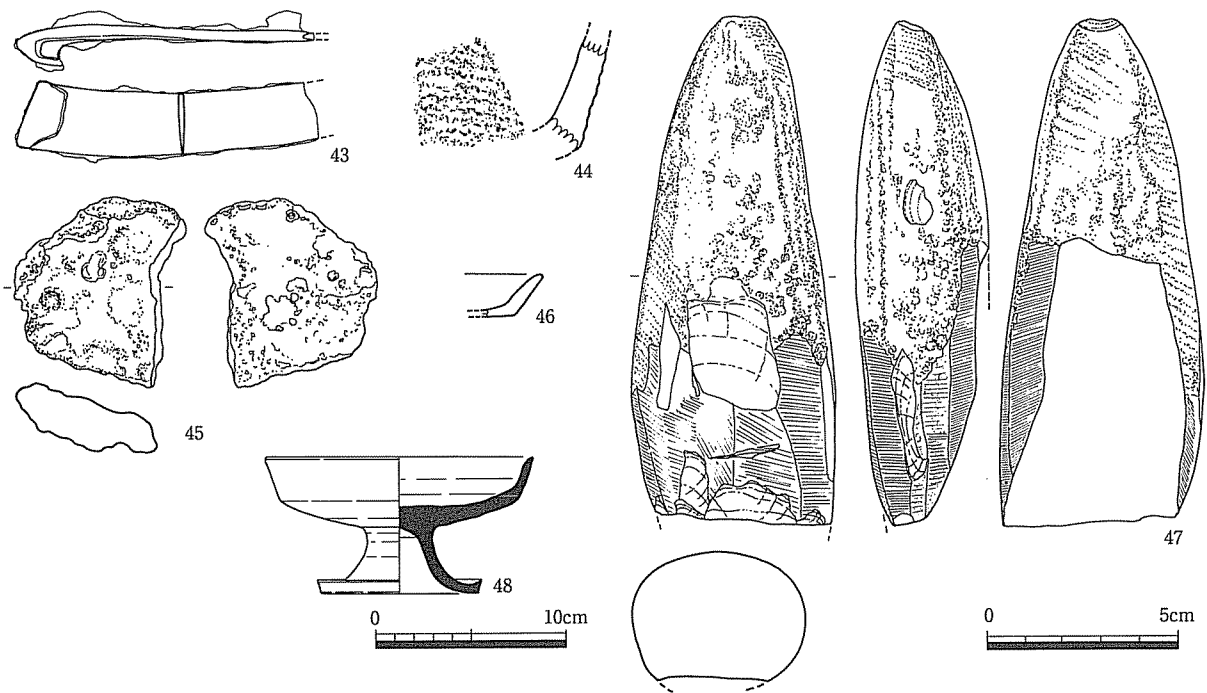


図48 9413調査地点出土遺物実測図3 (1/4・1/2)

の破片であり、外面に墨書が施されているものである。いずれも字の内容については不明である。

9413地点第1トレンチ出土遺物

2～4は第1トレンチの包含層から出土した須恵器の蓋、高坏、坏である。

1号竪穴住居址出土遺物

1は1号竪穴住居址から出土した須恵器の坏身である。中央より半分に割れていた。6世紀末～7世紀初の時期であろう。

9413地点第2トレンチ出土遺物

本トレンチからは多様な時期の遺物が出土している。中心は5～10・18～20のような古代遺物であるが、11～17のような縄文時代後期を中心とした時期の土器なども出土している。

5は土師器の坏である。6は土師器の碗の底部である。道路面から出土しており、道路の時期の上限を示す資料である。7は土師器の坏であるが、内外面をヘラ磨きする。外面の丹色が鮮やかである。8は土師器の蓋である。外面の風化が著しい。9は須恵器の長頸壺の頸部～口縁部である。10は赤焼き須恵器の鉢の口縁部片である。18は滑石製石鍋の把手部分の破片である。19は布目瓦の平瓦の破片である。20は土師器の甕形土器であり、底部を欠く。口縁部が窄まらないスマートな器形である。11～17は縄文時代後期の鐘ヶ崎式土器および磨消縄文系土器の鉢形土器の破片である。

9413地点第3トレンチ出土遺物

21～25は近世の施釉陶器の碗・皿の類である。26・27は須恵器の坏、28は須恵器の蓋である。31は鉄鏝、32は天草産砂岩製の砥石である。30は縄文時代の深鉢形土器の底部であり、34はサヌカイト製の石鏝である。これらはすべて2層を中心に出土した。

3号竪穴住居址出土遺物

29と33がそれにあたる。29は土師器の鉢形土器で、厚めの壁と丁寧ではないがヘラ磨き状の調整痕をもつ。33は土師器の小型甕形土器である。ほぼ完形であるが、一部欠損している。「住居址下」の注記があるが、本遺構に伴うものと思われる。

表 8 9413調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
46	1	須恵器	坏	口径 12.4 底径 5.9	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y6/1 外：Hue5Y6/2	1号住居址	
	2	須恵器	坏蓋		鈕	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y6/1 外：Hue5Y6/1	1Tr II層	
	3	須恵器	高坏		坏部1/6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y6/2 外：Hue5Y5/1	1Tr II層	
	4	土師器	坏	口径 12.2 底径 7.2 器高 3.0	口縁一部欠損	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5YR6/6 外：Hue5YR6/6	1Tr II層	丹塗
	5	土師器	坏	口径 12.3 底径 9.0 器高 3.3	2/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5YR7/8 外：Hue7.5YR8/6	2Tr	丹塗痕あり
	6	土師器	碗	底径 3.9	底部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5YR7/8 外：Hue5YR7/8	2Tr 道	
	7	土師器	坏	口径 13.1	1/4	内：磨き 外：磨き	内：Hue5YR6/6 外：Hue2.5YR5/8	2Tr	外面丹塗
	8	土師器	坏蓋	口径 17.6 器高 2.4	1/2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue7.5YR8/6 外：Hue7.5YR8/6	2Tr	外面丹塗
	9	須恵器	長頸壺	口径 9.7	頸部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y6/2 外：Hue5Y6/2	2Tr	
	10	須恵器	甕	口径 27.3	口縁1/4	内：ナデ 外：ハケ目	内：Hue5YR7/6 外：Hue7.5YR7/5	2Tr	
	11	縄文土器			口縁部片	内：磨き 外：	内：Hue10YR4/1 外：Hue	2Tr	刺突文
	12	縄文土器			口縁部片	内：磨き 外：磨き	内：Hue10YR4/2 外：Hue7.5YR3/1	2Tr	沈線・丹塗
	13	縄文土器			口縁部片	内：磨き 外：磨き	内：Hue10YR4/2 外：Hue10YR3/2	2Tr	沈線・刺突文・丹塗
	14	縄文土器	(鉢)		口縁部片	内：磨き 外：	内：Hue10YR5/3 外：Hue	2Tr	刺突文・貫通孔・丹塗
	15	縄文土器	(鉢)		口縁部片	内：磨き 外：	内：Hue10YR3/1 外：Hue	2Tr	刺突文 貫通孔
	16	縄文土器			口縁部片	内：磨き 外：磨き	内：Hue2.5Y5/1 外：Hue2.5Y7/2	2Tr	
47	17	縄文土器	鉢		胴部片	内：磨き 外：磨き	内：Hue10YR4/1 外：Hue10YR4/1	2Tr	
	18	石製品	石鍋	長さ 8.0 幅 4.5 厚さ 1.85	把手部片	内： 外：	Hue10Y6/1	2Tr	
	19	瓦	平瓦	長さ 13.1 幅 5.5 厚さ 2.01		内：布目 外：縄目	内：Hue3.5Y7/2 外：HueN5/0	2Tr II層	
	20	土師器	甕	口径 24.0 最大径 26.8	1/4	内：削り 外：	内：Hue5Y5/1 外：Hue7.5YR8/6	2Tr	煤付着
47	21	陶器	碗	底径 4.4	底部1/2	内：黒褐釉 外：黒褐釉	内：Hue10YR2/2 外：Hue2.5Y7/4	3Tr	
	22	陶器	碗	底径 6.8	底部1/4	内：黒褐釉 外：黒褐釉	内：Hue5Y5/1 外：Hue10YR2/2	3Tr	
	23	陶器	碗	底径 8.5	底部1/4	内：灰釉 外：	内：Hue7.5Y5/1 外：Hue7.5YR5/3	3Tr	

1. 渡鹿グラウンド整備に伴う発掘調査

表 8 9418調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
47	24	陶器	皿	底径 10.9	底部片	内：緑色釉 外：	内：Hue 外：Hue2.5Y6/3	3Tr	
	25	陶器	碗	底径 9.7	底部1/6	内： 外：黒褐釉	内：Hue2.5Y6/2 外：Hue7.5YR 1.7/7	3Tr	
	26	須恵器	坏	口径 10.9 器高 3.9	1/6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue2.5Y7/2 外：Hue7.5Y5/1	3Tr	
	27	須恵器	坏	口径 12.9	1/6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y5/1 外：Hue5Y5/1	3Tr	
	28	須恵器	蓋	口径 13.8	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue2.5Y5/2 外：Hue5Y5/1	3Tr	
	29	土師器	鉢	口径 26.4	口縁1/5	内：磨き 外：磨き	内：Hue2.5YR6/8 外：Hue3.5YR5/8	3Tr 住居 址	
	30	縄文土器	深鉢	底径 8.2	底部1/4	内：ヘラナデ 外：ヘラナデ	内：Hue10YR7/4 外：Hue5YR6/6	3Tr II層	
	31	鉄製品	鉄鏃	長さ 14.35 幅 0.85 厚さ 3.2				3Tr II層	
	32	石製品	砥石	長さ 10.9 幅 3.75 厚さ 6.8		内： 外：	Hue10YR8/3	3Tr II層	
	33	土師器	甕	口径 13 器高 13.9	1/4	内：削り 外：ハケ目	内：Hue7.5YR8/6 外：Hue7.5YR7/6	3Tr 住居 下	
	34	石器	打製石鏃	長さ 3.6 幅 1.65 厚さ 3.4		内： 外：	Hue5Y4/1	3Tr II層 下層	サヌカイト
	35	土師器	甕	口径 15.0	口縁1/4	内：削り 外：ハケ目	内：Hue10YR6/4 外：Hue7.5YR6/4	4Tr4号住 居址	
	36	土師器	甕	口径 18.2 最大径 22.75	口・肩部 1/3	内：削り 外：ハケ目	内：Hue5Y6/1 外：Hue7.5YR6/6	4Tr4号住 居址	煤付着
	37	土師器	高坏	口径 14.3	坏部	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5YR6/6 外：Hue5YR6/6	4Tr5号住 居址	内丹塗
	38	土師器	高坏	口径 14.6	坏部3/4	内：磨き 外：磨き	内：Hue5YR6/6 外：Hue5YR6/6	4Tr5号住 居址	
	39	土師器	小壺	口径 9.5 器高 10.6	完形	内：削り 外：ハケ目	内：Hue5YR6/6 外：Hue5YR6/6	4Tr5号住 居址	
	40	須恵器	坏	口径 12.9 底径 6.0 器高 3.4	1/4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue2.5Y7/1 外：Hue2.5Y7/1	4Tr6号住 居址	
	41	土師器	甕	口径 19.1	口・肩部 1/3	内：削り 外：ハケ目	内：Hue10YR7/4 外：Hue7.5YR6/6	4Tr7号住 居址	
42	土師器	甕	口径 26.9	口・肩部 1/4	内：削り 外：ハケ目	内：Hue10YR8/3 外：Hue10YR8/3	4Tr7号住 居址		
48	43	鉄製品	鎌	長さ 7.95 幅 1.7 厚さ 0.16	一部欠損		Hue10YR2/3	4Tr4号住 居址竈	
	44	縄文土器	深鉢		胴部片	内：押型文 外：ナデ	内：Hue5Y4/1 外：Hue10YR7/4	4Tr	
	45	鉄製品	鉄滓				Hue10YR4/3	4Tr5号住 居址竈	
	46	土師器	坏		破片	内：磨き 外：磨き	内：HueN1.5/0 外：Hue2.5Y8/4	3Tr	

表 8 9413調査地点出土遺物観察表

図	No.	遺物	種類(器種)	法量 (cm)	残存量	特徴	色調	出土遺構	備考
48	47	石器	磨製石斧	長さ 13.3 幅 5.4 厚さ 3.45	刃部欠損		Hue5GY5/1	4Tr II層	
	48	須恵器	高坏	口径 14.2 底径 8.4 器高 7.2	2/3	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内：Hue5Y8/2 外：Hue2.5Y6/1	グリッド 外	

9413地点第4トレンチ出土遺物

44は山形押型文土器の破片である。47は磨製石斧であるが、刃部を大きく破損している。頭部から胴部にかけて敲打を施し、刃部側は平坦な面をなすように研磨している。形態からみて縄文時代後・晩期の所産であろう。

4号竪穴住居址出土遺物

35は土師器の甕形土器の破片である。36も同じく甕形土器であるが、35に比べやや大きめ破片である。肩の張らないスマートな体部をもち、外面の刷毛目や内面の削り調整も丁寧である。口縁部は外反しない。43は手鎌である。片側を欠損している。45は鉄滓である。

5号竪穴住居址出土遺物

37～39が本住居より出土した遺物である。37・38は土師器の高坏の坏部であり、ほぼ脚部を欠くのみである。ヘラ磨き状の調整があった痕跡はあるが、器表面の風化が激しく、不明瞭である。竈よりの出土であり、本住居址の時期を示す遺物である。39は土師器の小型の甕形土器で、完形品である。住居直上から出土している。

6号竪穴住居址出土遺物

40は須恵器の坏の破片である。

7号竪穴住居址出土遺物

41と47は土師器の甕形土器口縁部の大型破片である。口縁部の反り具合が両者で異なる。外面の刷毛目は非常に細かい。

2. まとめ

本調査地点は旧詫麻郡の中でも中心的な位置を占める大江遺跡群の北端に位置する。昭和52年の調査において7世紀初頭から9世紀にかけての竪穴住居址13基が検出されているところから、今回遺構として確認した竪穴住居址6基を加えて19軒が確認されたことになる。今回検出した竪穴住居址の時期については、時期を明確に示す遺物に乏しいため判断が難しいが、5号住居址が8世紀前半ごろと考えると、それに近接した時期である8世紀後半ごろまでの時期を想定しておきたい。

また、今回特筆すべきは2次調査第2トレンチで確認した幅2mの道路跡であろう。検出幅が短いので正確ではないが、磁北から西にわずかに振れており、この方位は本地点の西100mのところを通ると推定されている官道(駅道)と同じ方位である。条里制を考慮するとこの地点との距離からみて1町に相当し、この道の示すラインが坪境の可能性が高い。時期的には8世紀後半ごろと思われる。

集落の性格を考えると、本地点はいずれもグラウンド東南部よりの検出であり全容は明らかではないが、かなり大規模な集落が存在したことが予想される。住居の形成年代は、先に述べたように、8世紀中葉から後半を中心としているものの、7世紀前半代に遡る資料も含まれており、若干長い時

2. まとめ

間幅でおさえしておく必要がある。昭和52年の調査においても同様の状況が認められる。

消滅の時期は9世紀代まで下る資料を欠いていることから、大江遺跡群の既往の調査でも明らかになったように、9世紀中葉以降は、郡家や国府の移転などにより集落の縮小傾向が見られる。したがって当調査地点に展開した集落も大江遺跡群内の集落と同じく、託麻郡家及び郡寺に関する拠点集落の一端を担うものとして捉えられよう。今回の調査の成果は、このような大江遺跡群の傾向を追認した結果となり、さらに部分的ではあるが道路跡および竪穴住居群は当時の集落景観の復元において貴重な資料となる。